

幼小をつなぐ音楽活動の可能性

—京都幼稚園と京都女子大学附属小学校1年生の実践をふまえて—

岡 林 典 子

(児童学科教授)

砂 崎 美 由 紀

(附属小学校教諭)

山 崎 菜 央

(附属小学校教諭)

深 澤 素 子

(京都幼稚園主事)

難 波 正 明

(教育学科教授)

1. はじめに

本研究の目的は、幼稚園と小学校が円滑な接続を果たせるような、連続性・一貫性をもった音楽プログラムの開発を目指す前段階として、保育実践と授業実践において子どもの実態を捉え、幼小をつなぐ音楽活動の可能性を探ることである。

平成20年に告示された「幼稚園教育要領」「学習指導要領」では、「小1プロブレム」や「学びの連続性」などの問題を背景にして、幼児期の教育と児童期の教育の連続性・一貫性が確保された円滑な接続が求められ、子どもに対して体系的な教育を組織的に行うようにすることが明記された。

また、平成22年11月に提出された文部科学省「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」の報告書では、幼小接続の重要性が示唆され、幼児期の教育と児童期の教育を円滑に接続するには、両者の違いや連続性・一貫性を含めた接続の構造を「教育の目的・目標」「教育課程」「教育活動」の3段構造で捉え、体系的に理解することが必要であることが示された¹⁾。

そうした流れの中、近年では文部科学省より研究開発学校の指定を受けた幼稚園や小学校の連携研究をはじめとして、都道府県や市町村など自治体での取り組みにおいても、幼児と児童の交流活動や、教職員同士の交流など、多様な幼小連携の実践が全国で数多くみられるようになった。

平成24年度に実施された文部科学省幼児教育

実態調査²⁾によると、幼稚園と小学校での幼児と児童の交流実施率は75.8%（公立95.7%、私立62.4%）で、平成20年度の同調査結果³⁾の55.6%（公立72.6%、私立44.6%）と比べると、約20%の上昇がみられた。また、教員同士の交流実施率においても54.6%（公立69.2%、私立45.1%）から72.2%（公立90.3%、私立61.5%）へと上昇している。しかし、いずれにおいても私立の割合は、公立を大幅に下回っているのが現状である。

さらに、市町村における教育課程の編成での連携は、平成24年度調査において、「ステップ2：年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない」が62.1%を占めており、連続性・一貫性をもった相互に意義のある交流が十分になされているとは言い難い状況がある。

これらの問題をもとに、校種は異なるが同じ学園内で音楽教育と表現教育に携わる執筆者らは、2013年3月より幼稚園と小学校が円滑な接続を果たせるような、連続性・一貫性をもった音楽プログラムの開発を目指す研究に着手した。研究を進めるに当たり、2013年3月と6月にカンファレンス⁴⁾を行い、まずは子ども達の実態を捉えるために、幼稚園と小学校のあるがままの保育実践、授業実践を参観して記録を取ることにした。

本稿は一連の研究の第一段階として、保育実践と授業実践の参観により、幼児期の子どもと低学年の児童の表現の特性や傾向を捉え、それらを考慮して幼小をつなぐ音楽活動の可能性を

検討するものである。

2. 近年における幼小連携の取り組み

2.1 幼小連携における「接続期」の捉え方

前述の文部科学省「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」の報告書では、幼児期と児童期をつながりて捉えようとする「接続期」という考え方を提唱している⁵⁾。接続期は、学びの基礎力の育成期間である幼児期と児童期の教育双方が接続を意識する期間であるが、幼児期全体と児童期全体を通じた子どもの発達や学びの連続性を意識して捉えるべきであるとされている。

また、接続期の始期・終期の設定は、各学校や施設が子どもの実態をふまえて、幼児期の年長から児童期（低学年）の期間における適切な期間を設定することとされている。

2.2 文部科学省研究開発学校の取り組み

2.2.1 神戸大学附属幼稚園と附属小学校の取り組み⁶⁾

神戸大学附属幼稚園は、平成22年度より24年度まで研究開発学校の指定を受け、「幼稚園教育と小学校教育の接続期における円滑な接続のための新分野創設にむけたカリキュラムと指導方法の開発」を行った。

研究成果として、10の視点と40の下位項目からなる新しい教育課程及び指導計画が「神戸大学附属幼稚園プラン」として提案され、詳細な観点による発達の捉えと、幼児教育の顕在化が図られた。同時に、それは小学校教育との接続関係を詳細に示すことにもつながり、幼児期の学びが小学校教育のどの教科の学びにつながっていくのかを説明できるようになった点に意義が見出せる。

しかし、国語、算数、音楽については、取り組みによって新しく示された教育課程と従来の「小学校学習指導要領」の関連が少ないという点が指摘されており、そこに開発の余地が残されている。

2.2.2 お茶の水女子大学附属幼稚園と附属小学校の取り組み⁷⁾

お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校は、平成13年度より15年度まで研究開発学校の指定を受け、「関わりあって学ぶ力を育成する教育内容・方法の開発研究」を行った。

この取り組みは、新たに「接続期」を設けて提唱し、従来の幼児教育と小学校教育の中間型の指導を行う「接続期」カリキュラムを編成したことや、ある特定の時期を「接続期」として明確に浮かび上がらせたことに意義が見出せる。その後も今日に至るまで接続期の研究は継続されており、小学校での学びにおける発展的な取り組みが報告されている⁸⁾。

2.2.3 鳴門教育大学学校教育学部附属幼稚園と附属小学校の取り組み⁹⁾

鳴門教育大学学校教育学部附属幼稚園は、平成13年度より15年度まで研究開発学校の指定を受け、「幼小の連携教育」を課題として研究がなされた。

この研究では、1年生での学習を「生活学習」として位置づけ、教科の枠を取り外して合科カリキュラムを編成し、幼稚園で培われた「生活的な学び」の中で教科の内容を学ぶ実践が行われた。また、幼稚園と小学校の「合同保育／授業」という実践を通して、教科書に依拠する学習を、幼稚園における豊かな経験を活かした学びへと変革する方法を模索した。幼小の教育をつなぐためのカリキュラムづくりの中で実践された「合同保育／授業」での「おとの国」の記述は、幼小をつなぐ音楽活動を検討する上で参考になるものである。

この他にも、滋賀大学教育学部附属幼稚園や新潟大学教育学部附属幼稚園なども研究開発学校の指定を受けて幼小連携の研究を進めている。

2.3 音楽活動に関わる幼小連携の研究

三浦ら¹⁰⁾は音楽教育における保幼小連携を見据えて、2004年に小学校1・2年の担任と音楽部教諭、さらに保育所と幼稚園を対象に音楽教育に関する意識調査に取り組み、音楽教育の連

携を妨げている問題を明らかにした。そこでは、連携の必要性、実施の可能性に対する期待や意識の低さ、情報の少なさ、音楽的能力差を生む就学前教育の実態などが挙げられ、その解決のために、子どもの能力を評価する資料の必要性や音楽的能力を系統的に育成する指導法の必要性が示唆された。また、ピッチマッチング能力の調査が音楽的発達を明らかにする指標としてふさわしいと指摘された。その後、幼小連携の音楽カリキュラム開発の基礎的研究として、ピッチマッチングや一斉唱時の子どもの歌唱能力の発達に注目した研究が継続されている¹¹⁾。

北野は福岡教育大学と附属幼稚園の連携のもとに、「聴く力プロジェクト」に着手した。また、三浦との共同研究も数多く行っており、両者は幼小の連携に関して共通した基本的考えを有して、研究を行っている¹²⁾。

三浦・北野らの一連の研究は、幼小連携の音楽カリキュラム開発の基礎として押さえておくべき発達の連続性や音楽的能力の発達に着目している点が、幼小をつなぐ音楽プログラムの開発を目指す執筆者らには参考になる。

白川らは、幼児期の楽しい学びを小学校の教科としての学習に組み換えるには、どのような方法や課題があるのかを調査検討するために、小学校1年生の「体育」「音楽」の授業参観を継続して行っている¹³⁾。これらの研究は学びの芽生えを軸として、一貫した幼小のカリキュラムの開発を試みる研究であり、授業参観という方法論について本研究の参考になる。

3. 京都幼稚園と京都女子大学附属小学校における連携への取り組み

京都幼稚園では例年、卒園児約50名のうち85%程度が京都女子大学附属小学校へ進学している。進学者は、仏教による同じ建学の精神のもとで一貫教育を受けることとなる。

3.1 園児と児童の交流

3.1.1 年長児と小学校3年生児童の交流

3年生の児童が二学期の総合的学習「福祉～みんながしあわせになる～」の取り組みの中で、

京都幼稚園年長児クラスを訪問し、絵本を読んだり折り紙をしたり、園庭で一緒に遊んだり、歌を発表しあったりして交流を図っている。これは、幼稚園・保育園・デイサービスセンターを訪問する活動の一つである。

3年生の学習のねらいは、年下の友だちに喜んでもらう活動として位置づけられている。一方、幼稚園年長児は、歌や合奏を身近なお兄さんやお姉さんである附属小学校の3年生に聴いてもらうのがとても嬉しいようである。また、小学生の演奏を聴いて、自分達もリコーダーが吹けるようになりたいと憧れを抱いている。

その後の継続的な取り組みとして、三学期には幼稚園児が小学校を訪問し、一緒に遊んだり学校探検をして、交流を深めている。

3.1.2 年長児と小学校5年生児童の交流

毎年5月21日は、学園の行事として宗祖降誕会が行われる。ここでは、幼稚園年長児と小学5年生の児童が歌や合奏の発表を行っており、当日の音楽発表を互いに見合うことで交流を図っている。

3.2 担任教諭による卒園児の引き継ぎ

毎年4月に、幼稚園の年長児クラスの担任と新1年生の担任が卒園児の引き継ぎを行っている。また、小学校入学後にも、授業参観などの機会に幼稚園の担任が児童の様子を参観している。平成24年度には、生活科の授業「動物とふれあい」（京都獣医師会から医師を招いて行う、動物とのふれあい方といのちについての学習である）を幼稚園の担任と主事が参観した。

この他に、教師間の連絡会により、小学校担任は児童の生活環境や個別の発達への配慮などを知ることができ、入学後の児童の教育活動の参考にすることができる。一方、幼稚園担任は入学後の子どもの様子を見ることで一人一人の成長を見守り続けることができる。

このように、個への対応としての連携はなされているが、接続期の園児と児童の連携は、これからの取り組み課題である。

4. 実践から捉える子どもの表現の実態

4.1 保育参観と授業参観の方法

対象：京都幼稚園年長児つき組32名、
附属小学校1年1組41名、2年1組41名
方法：京都幼稚園年長児つき組担任M先生の保育実践を岡林と難波が参観し、ビデオカメラ3台で動画記録を撮り、さらに筆記記録を加えた。また、附属小学校1年1組の音楽の授業を砂崎が行い、2年1組の音楽の授業を山崎が行った。それらを岡林、難波、山崎、深澤が参観し¹⁴⁾、ビデオカメラ3台で動画記録を撮り、さらに筆記記録を加えた。

尚、動画記録を基にDVDを作成して執筆者全員でデータを共有した。自身の授業や保育を行うために参観を行えない場合には、そのDVDを通して実践の様子を把握している。参観の実施日：参観の開始は第1回のカンファレンスで話し合い、行事予定などを考慮した上で都合のよい日を選んだ。参観と並行して、カンファレンスを3回行った。以下の表1、2に保育参観、授業参観の実施日と内容を示す。

〔表1〕 保育参観の実施日と内容

	保育参観実施日	内 容
第1回	2013年5月17日	日常の保育
第2回	同年7月2日	好きな遊びと泥んこ遊び
第3回	同年7月5日	好きな遊びとお誕生会
第4回	同年7月12日	日常の保育
第5回	同年7月16日	日常の保育
第6回	同年9月11日	好きな遊びと敬老の会

〔表2〕 授業参観の実施日と内容

	授業参観実施日	内 容
第1回	2013年5月28日	1年生の音楽科 《かたつむり》
第2回	同年6月25日	1年生の生活科 [サウンドマップづくり] 音楽科 《ひらいたひらいた》
第3回	同年7月9日	1年生の音楽科 《おちゃらか》と [鍵盤ハーモニカ]
第4回	同年7月12日	2年生の音楽科 [おまつり ワッシュイ]

第5回	同年7月16日	1年生の音楽科 [鍵盤ハーモニカ]
第6回	同年10月15日	1年生の音楽科 [楽器をつくろう]

先行研究と保育・授業の参観より、本研究では幼小の接続期を幼稚園年長児4月から小学校1年生3月までにすることとした。

4.2 京都幼稚園〈つき組〉の保育実践から

幼稚園は毎朝10時の仏参で一日の保育が始まる。子ども達は9時過ぎから登園を始め、仏参までの時間を友達と好きな遊びをしながら過ごしている(写真1)。10時になるとピアノに合わせて合掌し、お参りをする(写真2)。



〔写真1〕 好きな遊びをするつき組の子ども達



〔写真2〕 仏参で合掌をするつき組の子ども達

仏参後の朝の会では、季節の歌や行事の歌、手遊び歌やわらべうたなどが歌われる。また、当番の子どもが毎朝、皆の前に出て、「ニュース、ニュース」と唱えた後に最近の出来事を発表する。この場面では、譜例1のようなリズムカルな言葉のやりとりが子ども同士で交わされている。

〔譜例1〕《ニュースの唱え言葉》



実践の参観では、あるがままの子どもの表現の実態を捉え、幼児と児童の共通性と独自性を見出すように心がけた。そして、以下の事例にみられるような、子ども達の動きに関する特徴が多様な場面で捉えられた。



〔写真3〕 5人そろってジャンプ

① 自発的に声を合わせてジャンプする

【事例1】ジャンプ「まえ・まえ・まえ」

幼稚園のホールで敬老参観の行事を終えた子ども達は、気分が高揚した様子で保育室に戻ってきた。20分後には、それぞれの祖父母が保育室に顔を見せることになっている。次の活動まで、少しリラックスした時間が流れている。

8割ほどの子ども達が着席すると、3人の男児(A・B・C)が並んで立ち上がり、「まえ・まえ・まえ」と声をそろえて3回ジャンプをして、尻もちをつく(譜例2)。隣の席に座っていた女児Aは、再びジャンプしようとする男児達と一緒に跳ぼうとして、タイミングと呼吸をみながら立ち上がる。そして、「まえ、まえ・まえ・まえ」の声に合わせて、今度は5人(男児A・B・C・D、女児A)でそろって跳んだ(写真3)。

向かい側に席でこのジャンプを見ていた男児Eは、立ち上がって同様のジャンプを試みた。

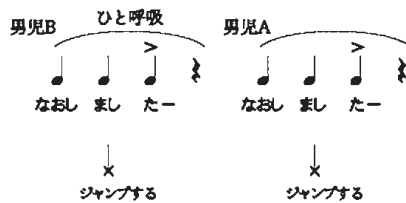
【事例2】ジャンプ「なおし・まし・たー」

事例1の直後、保育者の「お念珠なおしましたか¹⁵⁾」の言葉かけに、男児Bが「なおし・まし・たー」とリズムカルに答えながら、両手を広げて前に向かって1回ジャンプをする。続いて隣の席の男児Aも同様に唱えながらジャンプをする(譜例3)。さらに続いて、隣の男児Dが立ち上がって軽いジャンプを繰り返す。

〔譜例2〕《「まえ・まえ・まえ」の言葉とジャンプ》



〔譜例3〕《「なおしましたー」の言葉とジャンプ》



これらの場面では、連鎖的に生じたジャンプの動きが特徴的であった。3人の子どもの「まえ・まえ・まえ」というジャンプをきっかけに、30秒間に子ども達は次々とジャンプを試みた。無自覚の学びではあるが、子ども達は動作を同期するために声を合わせたり、立ち上がって動作の始まるタイミングを計ったりして、人との関わりの中でリズムカルな動作のまとめ方や、呼吸や声を合わせる方法を学んでいることが捉えられた。

② 保育者の言葉をきっかけに、声と動作をリズムカルにまとめる

【事例3】フルーツバスケットの遊びの中で

事例2に続く場面で、フルーツバスケットの遊びをすることになった。M先生がルールを説明した後、最初にオニになった子どもがフルーツの名前を言い出せないでいると、先生は「じゃあ、みんなで『なあに?』（譜例4）って聞こう。セーノッ」と言葉をかける。

子ども達はM先生の作りだした「セーノッ」の拍節にのって、声を合わせて「な・あ・に」とオニに呼びかける。フルーツを言い出せなかった子ども（オニ）も、今度はスムーズに「いちご」と発話することができた。

その後もM先生は、「セーノッ」と拍節的なきっかけを作り、子ども達はその拍節にのって声を合わせて呼びかけ、オニが答えるという流れが生まれた。次第に子ども達の連帯感が高まり、拍節にのって手を打つ、両手・両足を上下させる、腰を浮かせて跳びあがるなどの動作が大きくなった。また、「な・あ・に」の音量も増して行き、リズムカルな応答が16回も繰り返された（譜例5）。

【譜例4】《M先生の言葉かけ「なあに」》

M先生



【譜例5】《つき組の子ども達のやりとり》

クラス
全員



(身体の動き)



子どもB



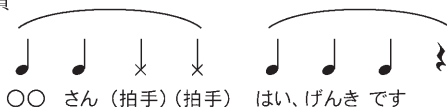
ども達の一体感を導いている。気持ちの高揚に従って子ども達の声と動作もより大きく豊かに表現されることが特徴的に捉えられた。

4.3 附属小学校〈1年1組〉の授業実践から

1年1組では毎朝、その日の体調を尋ねる「健康観察」でリズムカルな言葉のやりとりがなされている。クラス全員が一人の子どもに対して、「○○さん・●（拍手）・●（拍手）」と名前を呼びかけた後に2度拍手をして、4拍のまとまりを作る。呼びかけられた子どもは、その拍節にのって順番にその日の体調を「はい・元気・です」などのように調子よく答えていく（譜例6）。体調の悪い子どもは、拍節にはのらずに「はい、頭が痛いです」などと答え、全員で「おだいじに」と言葉がかけられる。こうしたやりとりが一通り終わると、次に《おはよう、みなさん》の歌が手拍子と身体を左右に揺らす動きを伴って歌われる。また、聖典に掲載されている楽譜を見ながら、仏教讃歌の《三帰依》《金の扉》などが歌われる（写真4）。

【譜例6】《健康観察でのやりとり》

クラス
全員



子どもC



【写真4】 聖典を見ながら仏教讃歌を歌う1年生

この場面では、保育者の「セーノ」という拍節的なかけ声をきっかけに、子ども達がリズムを共有し、気持ちを一つにしていく過程がみられた。連帯感が高まってくると、呼吸を合わせた3拍の「な・あ・に」という子ども達の声は次第に大きくなり、1拍目と3拍目で手を打つ、両手・両足を上下させてリズムをとる、腰を浮かせるなどの身体表現がみられた。ここでは、拍節を感じさせる保育者の意図的なかけ声が子

仏教讃歌を歌うことは、仏教の教えを建学の精神としている京都女子学園に属する小学校と幼稚園に共通している点であり、場の文化であるともいえる。一方、楽譜をみて歌うという点

は、教科書を用いて教育がなされる小学校の特徴であり、幼稚園との違いである。

また、小学校1年生の音楽科の授業実践からは、以下の事例にみられるような、音楽に伴う動きが特徴的に捉えられた。

① 音楽の拍節を感じて、ジャンプする

【事例4】《どれみのうた》に合わせてジャンプ
 音楽科の2回目の授業参観（6月25日）である。子ども達は広い音楽室に楕円形に並べられた椅子に座っていたが、立ち上がって担任教諭¹⁶⁾のピアノに合わせて《おんがくのおくりもの》¹⁷⁾を歌い、続けて《どれみのうた》を歌い始める。数人の子どもが歌の拍子に合わせてその場でジャンプを始めると（譜例7）、歌の進行に伴って次第にクラス全体に広がっていった。
 教科書には《どれみのたいそう》として両手を広げたり、手を肩や頭に乗せるなどのドレミの音階に合わせた動作が掲載されている¹⁸⁾。それらを子ども達は授業で習わずとも教科書から自発的に学び取っており、ジャンプをしながら歌に合わせた動きを試みていた（写真5）。

【譜例7】《どれみのうたの拍子に合わせたジャンプ》

ど は ど な つ の ど
 × × × ×
 ジャンプする



【写真5】 歌いながらジャンプする1年生

この場面では、数人の子ども達が歌と同時に2/4拍子の音楽の拍節によってジャンプを始めた。ピアノ伴奏の♩=120の軽快なテンポが、両足をそろえて軽くジャンプする動きを支えており、クラス全体への身体表現の広がりを生み

出している。

歌詞が「ドミミ、ミソソ、レファファ、ラシシ…」となる部分では、教師がまだ〈どれみたいそう〉の動作を十分に身につけていない子どもにも配慮して、伴奏のテンポが♩=90に変化した。子ども達は、ゆるやかに変化したテンポを感じながら、それぞれに身体表現を試みていた。

② 音楽の流れを感じて様々な身体表現をする

【事例5】《ひらいたひらいた》を聴いて身体表現する
 わらべうた《ひらいたひらいた》がCDから流れると、広い音楽室に楕円形に並べられた椅子に座っていた数人の男児が、曲の雰囲気をつかえて踊りだした。また、一人の女児が曲の拍子によってジャンプで前進を始めると（譜例8）、仲間の5、6名が同様にジャンプしながら円陣になり、互いの動作を同期させて楽しんでいる。しかし、曲のテンポ♩=80はジャンプするには少し遅いので、次第に曲の拍節とは合わなくなり、音楽と身体表現との同期は乱れて行った。ジャンプの他には、曲の流れを感じてゆっくり歩く、揺れる、手を打つなど、様々な身体表現がみられた。

【譜例8】《ひらいたひらいたに合わせた動き》

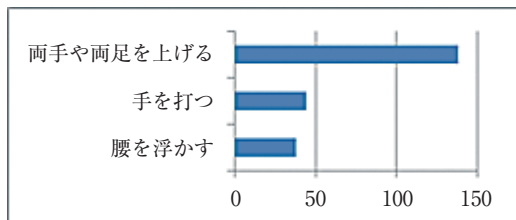
ひ ら い た ひ ら い た
 × ×
 ジャンプする ジャンプする

ここでは、子ども達がわらべうたの雰囲気や曲の流れ、拍子を感じて、様々な身体表現を試みていることが捉えられた。このように、リズムに誘発されて自ら身体を動かすことを喜ぶ低学年の子ども達の表現の実態が明らかになった。

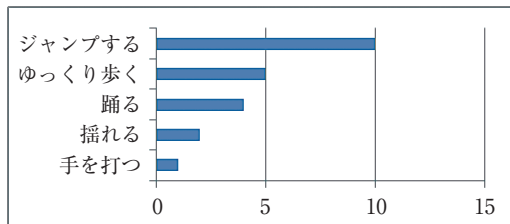
4. 総合的考察

① 実践より捉えられた子どもの表現の特性

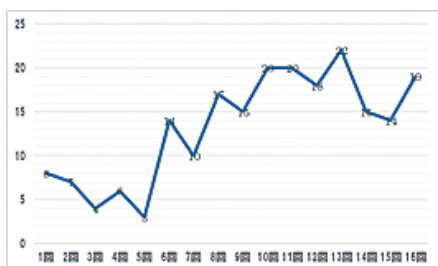
前章の5つの事例からは、幼稚園年長クラスと低学年（1年生）の子ども達の表現行動の特性として、声や言葉、音楽のリズムなどを全身で感じ取り、動きで表現していることが捉えられた。



【図1】 フルーツバスケットにみられた動作の種類と出現回数



【図3】 《ひらいたひらいた》の聴取時にみられた身体表現の種類と出現回数



【図2】 フルーツバスケット全16回中のかげ声に伴った動作の出現数の推移

上記の図1は、事例3のフルーツバスケットの遊びの中でみられた「なあに」のかげ声に伴った動作の種類と出現回数をまとめたものである。また図2は全16回のかげ声に伴った動作の出現数の推移である¹⁹⁾。

フルーツバスケットの遊びの中では、子ども達が「な・あ・に」とリズムカルに呼びかける声と「両手・両足を伴う全身の動き」を同期させる行動が、全16回のやりとりの中で延べ138回みられた。その他に「手を打つ」が44回、「腰を浮かしてリズムをとる」が38回みられた。図1からは、この時期の子どもが音声とともに身体全体の動きを用いて表現していることが読みとれる。

また、図2のグラフからは6回目以降に次第に子どもの連帯感が高まり、全身の動きを伴ってオニに呼びかけている状況がみてとれる。このように幼児期の子どもは、遊びの中で声の強弱、緩急、高低を用いて、他者とコミュニケーションをとりながら、声と動作を同期することや、タイミングや呼吸を図ることなど、音楽に関わる様々な能力を獲得しているものと思われる。

図3は事例5での《ひらいたひらいた》の聴取時にみられた子どもの身体表現の種類と出現回数をまとめたものである。最も多かったのは、「曲の拍子に合わせてジャンプする」であった。次に、わらべうたの曲の流れや雰囲気を感じて、ゆっくり歩く、踊る、揺れるなどが続いている。

5つの事例全体を通してこの時期の子どもの特性として、跳びはねる行動（ジャンプ）が多く捉えられた。実践の参観と事例の分析より、この時期の子どもが絶え間なく身体を動かし、身の回りの音や声、言葉のリズムに誘発されて身体を動かす心地よさを感じる発達段階にあることを、改めて確認することが出来た。

② 幼小をつなぐ音楽活動の可能性について

事例にみられた子ども達は、遊びの中で言葉のリズムや身体の動きのリズム、音楽のリズムを関わらせて躍動的なリズム表現を様々に行っていた。身体の動きを伴った表現は幼児から小学校低学年の子どもの表現の特性であり、この時期の子どもが身体を動かすことによって音楽経験を深める発達段階にあることを示唆している。

幼稚園教育要領の領域「表現」の内容には、(1)生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ、(4)感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする、(8)自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう（下線は筆者による）など、いくつかの項目に「動き」が挙げられている。また、平成20年版小学校学習指導要領解説音楽編の第1

学年及び第2学年の目標と内容には、表現に関する内容の歌唱活動の項目に「低学年では…遊びながら歌う活動や体の動きを伴った活動を効果的に取り入れるとともに〔共通事項〕との関連を図り、楽しい歌唱活動を進めることが大切である」とある。そして、音楽づくりの活動の項目には「音遊びの例としては、…体の動きに合わせて声や音を出す遊びなどが考えられる」（下線は筆者による）とあり、「動き」は幼小をつなぐ音楽活動の「キーワード」となり得るものである。

一方、リズムは音楽活動への参加の原動力であるといわれており²⁰⁾、新教育要領では新たに共通事項が設けられた。低学年では「音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れやフレーズなどの音楽を特徴づけている要素」が表現及び鑑賞のすべての活動において共通に指導されるべき内容として挙げられ、児童の発達段階に即したリズム指導の適時性が示唆されている。

以上のことをふまえると、本研究ではリズム教育において動きを伴った音楽活動を行うことに、幼小をつなぐ可能性を見出すことができる。乳幼児期から子どもが獲得しつつあるリズム感、事例にもみられたように母国語である日本語の言語的リズム感や、歩く、跳ぶ、手を打つなどの身体的リズム感と無関係ではない。リズム教育は、子どもの音楽的育ちの文化的背景や子どもの表現の実態に目を向ける必要がある。今後、具体的なプログラムや指導法の開発に当たっては、子どもが獲得してきたリズム感とそれ以外のリズム様式の学習との調和を考えて取り組みたい。

5. おわりに

本稿では、幼稚園と小学校の円滑なつながりのある音楽教育プログラムを開発することを目指す研究の第一段階として、京都幼稚園の保育実践と京都女子大学附属小学校の授業実践の参観より、リズム教育における動きを伴った音楽活動に、幼小をつなぐ可能性を見出すことができた。今後は継続して具体的な音楽教育プログラムや指導法を検討していきたい。

また、本稿では行動分析ソフトを用いることにより、子どもの音楽行動のいくらかを数値データにして挙げるのが出来たが、まだ十分な分析を行えたとはいえない。また、音声の強弱、緩急、高低を科学的に分析するまでには至らなかったのも、その点については今後の検討課題としたい。

【註】

- 1) 文部科学省：幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議報告書『幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方』2010.11.11 pp.7-13
- 2) 文部科学省初等中等教育局幼児教育課『平成24年度幼児教育実態調査』2013.3
- 3) 文部科学省初等中等教育局幼児教育課『平成20年度幼児教育実態調査』2009.3
- 4) 6月のカンファレンスは、筆者らに加え、共同研究者である甲南女子大学の坂井康子教授、神戸海星女子学院大学の南夏世准教授、京都橘大学の佐野仁美准教授も参加して行った。
- 5) 前掲書、註1) p.30
- 6) 神戸大学付属幼稚園「幼小をつなぐ幼児期のカリキュラム『神戸大学付属幼稚園プラン』の創造～1の方向・40の道筋で幼児教育を可視化する～」幼稚園研究紀要36 2012.12
- 7) ①横井絃子「幼小連携における『接続期』の創造と発展」お茶の水女子大学子ども発達研究センター紀要 2007 pp.45-52, ②酒井朗・横井絃子『保幼小連携の原理と実践—移行期の子どもへの支援—』ミネルヴァ書房 2011 pp.126-128
- 8) 小玉亮子ほか「幼小接続期の実践と課題—お茶の水女子大学付属幼稚園・附属小学校の試み—」日本保育学会第66回大会要旨集 2013 p.134
- 9) ①佐々木宏子『なめらかな幼小の連携教育—その実践とモデルカリキュラム』チャイルド社 2004 ②酒井朗・横井絃子『保幼小連携の原理と実践—移行期の子どもへの支援—』ミネルヴァ書房 2011 pp.128-129
- 10) 三村真弓・吉富功修・北野幸子「音楽教育における保幼小連携のための基礎的研究—音楽教育に関する意識調査を中心に—」中国四国教育学会 教育学研究紀要 (CD-ROM版) 第50巻 2004 pp.267-272
- 11) ①三村真弓・吉富功修・岡岡美幸・青原栄子ほか「幼・小連携の音楽カリキュラム開発の基礎的研究(1)—幼児・児童のピッチマッチング能力に着目して—」広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要 第36号 2000 pp.95-100, ②三村真弓・青原栄子ほか「幼・小連携の音楽カリキュラム開発の基礎

- 的研究(2) —斉唱時における子どもの歌唱実態に着目して— 広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要 第37号 2009 pp. 145-150
- ③三村真弓・吉富功修・大橋美代子・青原栄子ほか「幼・小連携の音楽カリキュラム開発の基礎的研究(3) —斉唱時における子どもの歌唱能力の発達に着目して—」広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要 第38号 2010 pp. 87-92
- 12) ①北野幸子・三村真弓・吉富功修「家庭・保育所・幼稚園・小学校連携の課題に関する一考察—質的分析を中心に—」福岡教育大学紀要 第55号 第5分冊 2006 pp. 71-81
②北野幸子・三村真弓・吉富功修「保幼小連携教育の可能性—ハンガリーにおける系統的音楽教育実践の検討—」教育実践研究 第16号 2008 pp. 87-94
- 13) ①白川佳子・東ゆかり・西島大祐「幼小連携のカリキュラムについての研究～「体育」「音楽」の領域を中心に～」鎌倉女子大学学術研究所報 第8号 2008 pp. 77-80, ②白川佳子・東ゆかり・西島大祐・荒松礼乃ほか「幼小連携のカリキュラムについての一考察—小学一年生の「体育」「音楽」の授業観察を通して—」鎌倉女子大学紀要 第16号 2009. 3 pp. 51-63, ③白川佳子・東ゆかり・西島大祐・荒松礼乃・中島朋紀「幼小連携のカリキュラムについての研究—「体育」「音楽」の領域を中心に—」鎌倉女子大学学術研究所報 第10号 2010 pp. 17-23
- 14) 岡林は全ての保育、授業を参観したが、保育や授業などにより執筆者全員が参観に加われず、DVD映像を共有して共通理解を図った。
- 15) 「なおす」は関西弁で「片づける」の意味を指す。
- 16) 第2著者の砂崎は、1年1組の担任であり、1年生の音楽科の授業を担当している。第3著者の山崎は2年生以上の音楽科を担当している。
- 17) 『小学音楽 おんがくのおくりもの1』教育出版 2011 p. 61
- 18) 同上書 pp. 26-27
- 19) 行動の分析と表の作成には、ディケイエイチ社の「行動コーディングシステム」のソフトを用いた。
- 20) 野口孝信監修『低学年のリズム指導—教材化と指導資料』音楽之友社 1979
- ※本研究は、日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究(C)「幼小連携をふまえた音楽教育プログラムの開発」(課題番号: 25381279, 代表者: 岡林典子), および京都女子大学平成25年度研究経費助成を受けたものである。

【謝辞】

本研究に当たり、保育実践参観をご快諾くださいました京都幼稚園年長児クラス担任の松田幸恵先生、小畑絵里花先生をはじめ、諸先生方に、記して深く御礼を申し上げます。また、京都幼稚園の園児の皆さん、附属小学校の児童の皆さんにも心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。